

# 若くして「社会教育・生涯学習」を志す人々

都留文科大助教授 畑 潤

社会教育学の担当として都留文大（社会学科）に着任してから、十ヵ月たちました。まだ都留市のことも大学のこともほとんど何もわからず、「新天地」にやってきたような気分という点では初々しい一年生と同じです。その一年生を

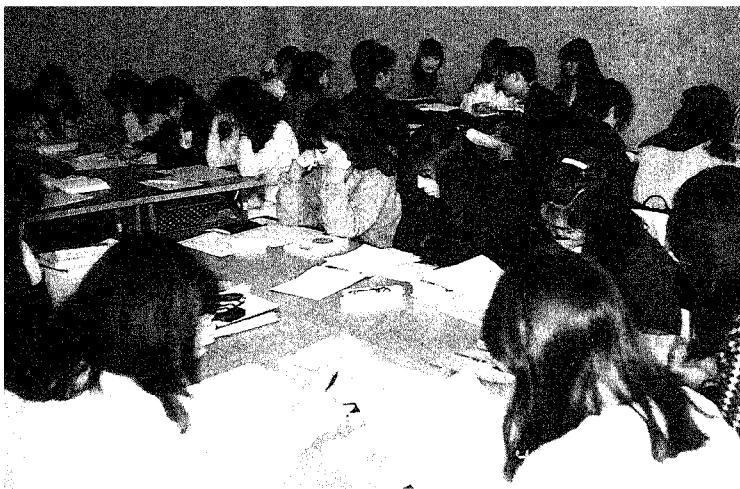
主力とする「社会調査・地域調査」という講義では、「都留市民の生活と学習・文化・スポーツ要求」を調べるといふ枠組みを設定し、四つのグループに分かれて「現実」にたちむかう「試みをおこないました」。

あらゆることを学生の自主性に任せましたので、調査対象の設定に苦しんだグループもありました。とくに「子どもグループ」の場合、調査対象として谷村第二小学校の承諾が得られたときは、学生たちはほんとうによろこびました。「婦人グループ」の場合は、学生たちは自分の知り合いをおとして二十七人もの方々の協力を得てきました。「青年グループ」のみ調査対象を文大生としましたが、その中の女子学生二人は、文大生の意識からみた都留市の学習・文化・スポーツ施設を調べ提言を試みています。市の老人大学を調査対象

とすることができた「高齢者グループ」は、「まとめ」をもって社会教育の職員や教育委員会の方に報告に行き、そこで「来年度も調査にきて良いと激励された」と、うれしそうに私に知らせてくれました。

調査にかかわる一切の試行錯誤の経験そのものが、学生諸君にとって大切なのだと考えています。とりわけ学生が「学ぶ営み」として市民の方々と交流していくという発想を自分の世界の根にもつことは、ゆたかな可能性を内包させているようにおもいます。私自身、これから学生たちと都留市・山梨県・長野県・東京三多摩を歩きたいと考えておりますが、とくに「社会教育」ということがらを接点に、よい出会いをもつことを願っております。

さてこの社会教育という分野ですが、学校教育のように先生の集団に任せる分野と違っ



て、地域で生活する住民・市民が直接自分たちで担っていかねばならないというところに特徴があります。じつはこのところが、学生諸君と学習をすすめようとしても、ひとつの壁になるのです。つまり、学校教育については、大なり小なり学生諸君自身の過去の経験をてがかりに、講義をすす

めることができます。ところが社会教育は、「労働し」「生活し」「生きる」という真剣勝負を出発点にして一人前の住民が改めて学習に向かう、ということを柱にしています。だから社会教育については、学生諸君はとまどうのです。「社会教育実践とは国民の自主的な学習・文化・スポーツ活動を援助する営みだ」といわれますから「青二才が成熟した大人の学習を援助する」ということになり、何だか「背伸び」をすることにもなるわけです。写真を見てください。これは、社会教育課題研究という時間のひとこまです。みんなとまどいつつ考え込んでいます。そしてこの「とまどい」の感覚が、人間形成に関与する職務につくもの（学校教師を含む）にとって、大切なのだと思います。

ところで、この時間にテキスト（小林文人編著『公民館の再発見―その新しい実践―』、国土社）から選んだ四つのテーマは、「会社人間」が地域の子育て運動に参加していく取り組み、障害をもつ青年たちと生活をひらいていくコーヒールハウスの実践、子育ての環境に疑問をもつ親が自分たちで子どもの地域環境マップづくりをおこなう実践、住民の表現活動（生活記録・自分史）を軸にした地域文化創造の実践です。いずれも住民が内容づくりや運営の主体になっていますが、「仕掛人」とし

ての、あるいは「縁の下」の力持ちとしての公民館職員が大切な役割をはたしています。

さてこの講義は、ほとんどグループ単位ですすめています。あらかじめ毎回の報告者すべてのグループで選び、その報告にもとづいて、グループで意見交換をおこないます。教師（私）は、テキストから読み取るべき「社会教育実践」の視点に関してすこしのアドバイスをするだけです。学生諸君の報告を聞いていて、「テキストの表面を突き破れないな」と判断されるときは、レポートの再提出・再報告・再討論をもとめることもあります。二度目のときは、テキストのたんなる要約とは異なった骨組みのあるレポートになってきます。こうした繰り返しは、じつは青年の「生きること」「学ぶこと」への自問を社会的な対象をもって行うこと、つまり「社会教育」に接しつつ生き方・学び方を意識化する、錬磨することに通じています。

同時に、この課題は若い世代だけに限られることではない、ということも真実でしょう。社会があらたらしい経験を重ねているとき、多様な世代が地域に暮らしの文化をつくっていくいとなみに参加し、その共通認識（＝世論）を形成していくことは、「地域づくり」の根幹になることだともいえます。